い。

・岸井さんの話にもありましたがどうぞ継続して発信していって下さい。身をもって体験することが最大の知恵となって積み重なっていくと思います。

・森のようちえんの認知が少ないので，具体的なテーマの話をしている方の話を聞きたかったです。

・森のようちえん的な実践について，もっと発信をしていただきたいと思います。

・私の園は森の中にあります。幼稚園でドングリの苗を育てること，保育の中で出来ます。役立てられるものでしょうか，単純にそう思っていました。自然環境を守ろうと思いました。周囲には昔のままの状態が残っています。遊びに来て実際に見て頂きたいです。

・今回，参加させていただきとても学ぶことがあり，勉強になりました。

・3･11 後, 環境はさらに大きく変化しました。自然のすばらしさはあってもそれ以上に放射能という体を蝕むむっ室が降り注ぎ，風，雨によって福島だけでなく日本中，川から海へ地球のあちらこちらを汚染してしまいました。それはいつまで続くのか予測できない現実です。ロシアの状態を見ても子ども達にとって大変なことと思います。「避けられるものは避ける」というのが必要かなとおもいますが，子どもにとってはこれまで渡したちが経験したことのない規制のある生活をしていってもらわなくてはいけない目に見えない物質との戦いです。そのことについての学習会もあればと思います。

・参加したいろいろな立場の人の体験や考え方などを聞きたかった。

結び

センターの「森のようちえん」は，2012 年度 3 年目を迎え，毎回の参加者が 10 数名となっている。親が参加するプログラムも，センターでのキャンプ料理講習会や，子どものプログラムと親プログラムが並行して行われる八ヶ岳の 1 泊キャンプなど充実してきた。このような活動を通じて親の理解が得られたことにより，一回限りではなく，継続的に参加する傾向が強まっていることも大いに関係している。今後，センターの学習会を通じて，子どもの育ちと象徴的な意味で用いられている「森」の真の意味を，継続的に考えることを目指し，子育てネットワークの中に定着させることを目指している。

参考資料：日野市活動計画「ひのっ子すくすくプラン」

報告

障害のある学生支援　～他大学視察報告～

子ども学科　市川　奈緒子

はじめに

「教育ルネサンス：発達障害と大学」…これは 2011 年 4 月，読売新聞のくらし・教育欄で連載されたコラムのテーマである。大学にも発達障害のある学生が「普通に」学んでおり，大学側もそのことを認識してさまざまな手立てをおこなうことが一般的なことと認知され始めている。

全国的には，積極的な取り組みをおこなっている大学を拠点校や協力校と指定し，それらを中心として，全国を 8 つの地域ブロックに分け，それぞれの地域の大学等間のネットワークを構築しながら, 障害がある学生の支援体制の整備･充実や,

研修・研究をおこなう「障害学生修学支援ネットワーク」が存在している。私は2010年度，2011年度の２年に渡って「発達障害のある学生支援」をテーマとする研究の助成を受け，その中で上記拠点校の視察をおこなった。この稿では，視察で学んだことを報告し，振り返って本学における支援について考察したい。

＜筑波大学＞

１．筑波大学の障害学生支援

筑波大学は，障害のある学生を専門に支援する部署「障害学生支援室」を持つ。これは，平成19年度にそれまでの障害学生支援委員会を前進させる形で整備されたもので，全学的な障害のある学生の実態調査，支援に関する方針の検討，環境整備に関する審議等を，各教育組織および事務組織と連携しながらおこなうところで，もちろん学生，その家族，教職員，各部門からのさまざまな相談にも応じている。

ただし，筑波大学の支援のコンセプトはあくまでも「全学的な支援」であり，障害学生支援室は支援の窓口であり，コーディネートやアドバイスはするけれども，実際の支援をおこなうのは，その学生と直接かかわりのある教職員やまわりの学生であるという姿勢が堅持されている。

また，障害のある学生の支援という理念にとどまらず，そこからすべての学生の成長を支援する体制と活動であると位置づけられているところが，筑波大学の特色でもある。元々が，学生の自主的な支援活動を，大学としての支援として形にするところにルーツがあるということから，障害を持つ学生のピア・チューター（学習補助者）を養成する講座等，学生が仲間である障害のある学生を支援する体制が整備されている。それとともに，平成14年度から「共生キャンパスとボランティア（平成19年度にこの講義名になった）」という全学対象授業を開設し，学生の望ましい障害観の育成，社会人として必要な支援技術の習得を目指すとしている。

また，障害科学を専門とする教員が中心となって，「障害学生支援専門部会」を運営し，学内支援や理解啓発活動，地域連携，研究活動等にアドバイザー，スーパーバイザーとして関与している。

２．筑波大学の視察報告

日時：2010年10月20日

視察担当者：市川奈緒子

筑波大学における視察応対者：

・鳥山由子先生
　障害学生支援室シニアアドバイザー
・青柳まゆみ先生
　障害学生支援室専任教員
　障害学生支援コーディネータ
・野呂文行先生
　人間総合科学研究科教員（障害科学）
　障害学生支援専門部会発達障害担当

（※所属や職名は視察当時のものである）

①身体障害学生支援の様子

もともとは視覚障害や聴覚障害を持つ学生の支援として，手話サークルや点字サークル等の学生の自主的な活動を，大学がバックアップして体制を整えてきたという経緯があり，身体障害を持つ学生の支援は歴史も古く，多岐に渡る。たとえばキャンパスが非常に広いため，運動障害のある学生で必要な場合は，キャンパス内をタクシーで移動する（タクシー代は大学持ち）ことが認められている。

写真①は，弱視等視覚にハンディのある学生が使う拡大読書器である。視覚障害，聴覚障害，運

動障害等，各障害別に支援や活動の拠点となる部屋があり，こういった支援グッズがたくさん取りそろえてあるほか，障害学生と支援学生の居場所や活動場所ともなっている。前述の障害学生支援専門部会の教員がスーパーバイザーとなって，支援や活動を後押ししている。

写真②

写真③

写真②は，ある運動障害の比較的重い学生のためのトイレである。運動障害のある学生のための環境構成はいたるところに整備されており，写真③の昇降機も必要なところには必ずつけられているが，ひとことで運動障害といってもその内容はまったく異なるため，とくにトイレ等は個別の環境作りが必要になってくる。

こうした体制を目のあたりにして感じることは，障害のある学生がお仕着せの支援を甘受するのではなく，自分にはどのような支援が必要か，何があれば何ができるのかを主体的に考え，検討し，必要なところに伝えて調整していく力をつけていくに違いないということである。

②発達障害のある学生の支援について

障害学生支援専門部会発達障害担当の野呂先生からお話をうかがった。以下，野呂先生からお聞きしたことの概要である。

・発達障害のある学生の実態調査には，視察をおこなった 2010 年 10 月当時，まだ取り組めていない。
・学生相談窓口，保健管理センター等から紹介されてくるか，直接保護者等から相談が持ち込まれる。学生相談窓口，保健管理センターには心理カウンセラー等の専門家がいて，さまざまな連絡調整・連携をおこなっている。
・保健管理センターとの連携で発達障害の自己チェックリストを作成したいと考えている。
・発達障害のある学生の持つ困難の傾向としては，知的に高いのにも関わらず，一人暮らしができなくて生活が破綻したり，授業中メモが取れずに不登校になったり，単位を落とす等のことが目立つ。完璧主義の学生も多く，完璧にやろうと思ってできなくなることもある。
・教職員の理解啓発のためには，研修もおこなっているが，教職員のための学生支援マニュアルの中に発達障害の項を設けている。
・発達障害のある学生の支援における困難は，問題を重複して持つ学生の支援や，どうしても単位がとれずに卒業できない学生の支援である。後者は進路変更の援助も必要になる。発達障害のある学生の就職支援も今後の課題である。

3．まとめ・感想

ホームページによると，2010 年度の在籍障害学生数は, 学群生（学部生）約 10,000 人中 32 人，大学院生約 6,500 人中 20 人である。数値的には多いように思われるが，比率ではそれぞれ 0.3% 程度である。シニアアドバイザーの鳥山先生は，障害学生修学支援セミナーで「障害学生支援は，障害学生のためだけのものではなく，一般の学生も一緒に育てる支援なのです。」と述べている。つまり，0.3% の学生にこれだけの支援をするという考え方ではなくて，その支援がすべての学生の成長につながるのだという思想が，これだけの

大きな支援体制の構築につながったように感じられた。共生社会の担い手を育てるということの姿勢とその意義を教えられた視察だった。

一方，上記のホームページの数値はすべてが身体障害（視覚障害，聴覚障害，運動障害，内部障害）である。発達障害のある学生の支援も，体制はできているように見受けられたが「目に見えない障害」であるために，把握も支援もやはり困難であるように思われた。

＜富山大学＞

1．富山大学の障害学生支援

富山大学には，やはり障害のある学生支援をメインとした専門部署「アクセシビリティ・コミュニケーション支援室」を設けている。その中には，身体障害学生支援部門もあり，支援機器の貸与，ピアサポーターの養成と支援のバックアップ等をおこなっている。

しかし，富山大学の学生支援が全国的に有名になったのはやはり発達障害のある学生支援の思想と内容である。平成19年度に，新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム「『オフ』と『オン』の調和による学生支援」を立ち上げた。このときにできたのが，トータルコミュニケーション支援室で，身体障害学生部門といっしょになり，現在のアクセシビリティ・コミュニケーション支援室が立ち上がったのちは、その中のトータルコミュニケーション支援部門として位置づけられている。対人的な困難を持つ高機能発達障害の学生支援を中核にしながら，その周辺にいる学生や一般学生も含めて，学生が何らかのコミュニケーションに関連する困難を感じて支援を求めるとき，およびまわりの学生や教職員が支援しようとして困難に陥ったときにも利用できる支援部門である。だから，支援対象者が発達障害の診断を持っているか，またはそうした傾向を持っているかを取り上げるのではなく，あくまでもその対象者にとって何がどう困難なのかを対象者の目線で明らかにし，どう対応していくのかを対象者とともに考え，必要なコーディネートをおこなうことが支援の中心となる。

支援の始まりは学生がSOSを出してきたときとなるため，その機会をできるだけ逃さず，しかも特徴を持つ学生が利用しやすいように，ＩＴ環境を利用したオンライン・ネットワークシステムを，従来からのオフライン・ネットワークシステム，つまり面接面談といった相談システムとの二重構造を持つ支援体制を組んでいる。そういったやり方で，必要なときに学生やまわりの支援者が自ら声を上げていけるように，システムを整えてきた。

このオンライン・ネットワークは，富山大学PSNS（Psycho-Social Networking Service）と名付けられていて，富山大学の学生と教職員だけがアクセスできる総合的なネットサービスとして運営されている。相談機能だけでなく，マイホームページ，ブログ，掲示板その他の，他のユーザーとのネットを通したコミュニケーションの場としてさまざまな利用ができるようになっている。

また，アクセシビリティリーダー，つまりさまざまな分野で障害の有無や年齢，文化背景といった多様性を理解し，包括的援助ができたり包括的発想を持てる人材を育成している。

2．富山大学の視察報告

日時：2011年12月19日

視察担当者：市川奈緒子，五十嵐元子（発達・教育相談室相談員）

視察応対者：

・斎藤清二先生
　保健管理センター教授
・西村優紀美先生
　保健管理センター准教授
・吉永崇史先生
　学生支援センター特命准教授

トータルコミュニケーション支援室（現在は部門となっている）は，この３人の先生方が中心になって立ち上げ，運営されてきた。

以下先生方からお聞きしたことの概要である。

トータルコミュニケーション支援室は，以前はある意味何でも相談窓口として利用されている部分があったが，現在履修登録の仕方等何でも気軽に相談できる「なんでも窓口」が設けられたので，コミュニケーションに困難を持つ学生への支援というところにある程度特化した支援をする部門となっている。

基本的に学生からの訴えから相談と支援が始まるが，発達障害的な傾向がかなり強く見られても，診断したり障害受容を迫ることはしない。アセスメントは重要だが，既製の知能検査等のものよりも，本人の話を聞いてそのひとがどのようなことに困っており，それをどのようにとらえており，どうしたいと思っているのかをショートストーリーにして共有していく。本人が「困っていることがこうやったら困らなくなった」というショートストーリーを自ら作成する手助けをしながら，学生が自己理解していくことを支援する。

それは，他の支援者との連携の際にも基本ラインとしており，「このひとはこういう障害を持っている」という説明ではなく，「このひとは２つ以上のことを言われると混乱するひとです」等のショートストーリーで情報共有する。「障害」を前面に出しても，そもそもひとによって障害の概念が異なるため，理解に齟齬が起きてくる。むしろ，具体的な支援をともにおこないながら，成功例を積み重ねていくことで，学生支援の連携体制を構築していっている。

支援と配慮に関しては，たとえば学生にとって有効な支援が見つかったとき，教員にできる配慮との摺り合わせをし，双方が納得し，共有できるような落としどころを見つけていくのも，この支援室の仕事である。

一般の学生が支援室をどのようにとらえているのかについては今後調査の必要があるだろう。しかし，相談に対する敷居はあまり高くないように思える。困ったらここに行けばいいんだなというぐらいの認識ではないかと考えている。

自分で発達障害を意識して，富山大学では支援をしているから選んだという学生はまだ非常に少ない。むしろ，大学入学後に問題が顕在化し，発達障害が明らかになるケースの方がはるかに多い。

３．まとめ・感想

障害をクリアにするよりも，学生支援の一環として，障害があるかもしれない学生，その周辺の学生の支援をしていくという方向性，そして，支援とは学生が自己理解しながら自己受容していく，その過程を支えていくことであるという姿勢が貫かれているように思われる。また支援体制を構築されてきた３人の先生方が非常に率直にお互いの意見を述べている様子から，このシステムを手に手を携えて作り上げてこられた苦難の大きさが見えたように感じられた。

おわりに

筑波大学と富山大学の視察に行けたことは，非常に有意義な経験であった。筑波大学が，障害のある学生と一般学生，支援学生を明確に位置づけて，ある意味「障害を自明のものとする」ところから出発し，そのことを全学的にどうとらえて共有していくかというところから支援体制を構築してきたのに対し，富山大学は「障害がある」ところから出発することをやめ，どんな学生でも困ったら SOS を出せる体制作りと，学生自身が納得できる自分のストーリーを作る（＝自己理解をしていく）ことを目指すところから支援を考えてきた。

ただ，これらは共通の，または重なった目的を持つようにも思われる。つまり，どちらも「支援を受けることが特別なことではない，恥ずべきことでもハンディキャップになることでもない」ということを明確化することを目指していることである。そして，どちらも学生の主体性を支えることを柱としている点である。支援を受けることも支援することにも主体的に取り組むこと，そして障害のために損なわれそうな主体性を回復するこ

と，そうした自分自身を理解して受け止めて生きていくこと…そういったことを大切にしながら構築されてきたように考えられる。

振り返って本学の学生支援はどうなのか。本学の学生支援の伝統とよさを受け継いでいくことは大切だが，他の大学の実践や思想を学び，比較検討することで本学の学生の傾向や志向，そして本学の学生支援が目指すべき方向性もよりクリアになるだろう。今後もそういったさまざまな学びが全学的に目指されることを望みたい。

謝辞

視察の際にお忙しいところ多大な時間を割いて私たちの質問に丁寧にお答えいただいたり，学内を案内してくださいました筑波大学と富山大学の先生方に心から感謝いたします。ありがとうございました。

引用文献・参考文献

・斎藤清二・西村優紀美・吉永崇史（2010）
「発達障害学生支援への挑戦」金剛出版
・鳥山由子・竹田一則編（2011）
「障害学生支援入門～誰もが輝くキャンパスを～」
ジアース教育新社